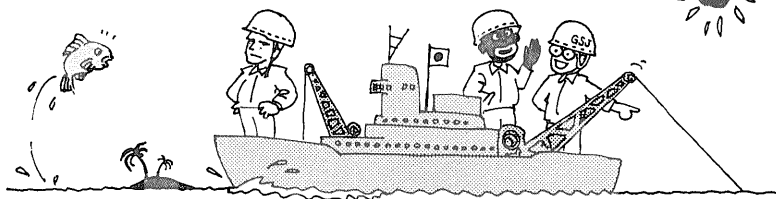


海外室だより



No. 12

紋どころ その3 中東・アフリカ編

1) サウジ・アラビア 鉱物資源総局 (Deputy Minister of Mineral Resources)

石油鉱物資源省に属し 大臣はかの有名な OPEC の星ザキ ヤマーニー博士です。サウジの首都はリアドにあり 石油鉱物資源省もリアドにあります。鉱物資源総局だけは紅海側のジェッダに設置されています。御存知のとおり 世界最大の石油輸出国であり 最盛期の1979年には日産1000万バレルの原油を生産したことがあります。その油田の規模の大きさは想像を絶するものがあり 世界最大の陸上油田であるガワールは 210キロの延長 東京から浜松までの間が油田としてつながっているという大きさです。

我が地質調査所との関係も深く 1963年から1980年まで18年間も鉱床調査ミッションが派遣されていました。

マークは石油の採掘井にハンマーの交叉の上方にはサウジ・アラビア王国 下側には石油鉱物資源省とアラビア語で記されています。

2) イラク 地質大学 (Iraq Geological College)

イラクは地質調査所のマークが入手できなかったため 当所資料室と資料交換している地質大学のマークに代えて掲載しました。マークの上方のアラビア語は右から左へと大学 地質 イラクと記され 下の数字は1965と読みます。算用数字をアラビア数字と俗に言いますが

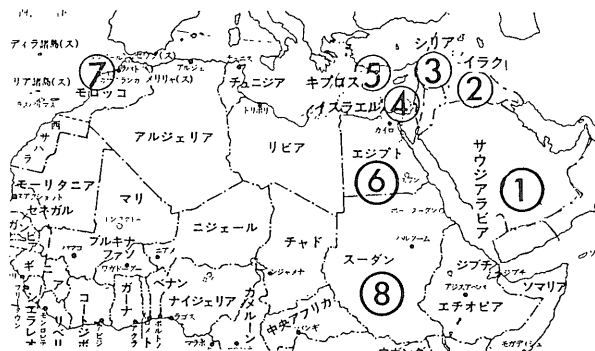
本当のアラビア数字は1と9だけが似ていて あとは似ても似つかぬ字体をしています。この1965の数字にもあるように 5は0で 0は・で表わします。イランも同様の数字を用いていますが 5だけは0ではなくハートの形です。

3) シリア 地質学会 (Syrian Geological Society)

シリアも地質学会のマークで代行します。地質断面と貝化石 ハンマーを組合せた精緻なデザインです。地質断面には堆積岩 火成岩から噴出岩まで盛りこんだ凝り様です。

4) イスラエル 地質調査所 (Geological Survey of Israel)

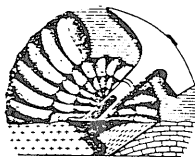
世界各地より移住したユダヤ人が「乳と蜜の流れる約束の地カナン」にイスラエルを建国してから40余年 4回にわたる中東戦争をきりぬけ 四面敵国の中を必死に生きぬいているのは御存知のとおりです。公用語はへ



①サウジアラビア



②イラク



③シリア



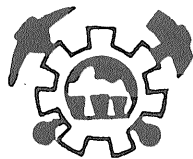
④イスラエル



(a) (b)



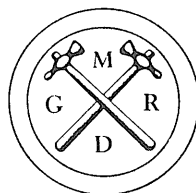
⑥キプロス



⑥エジプト



⑦モロッコ



⑧スーダン

ブライ語を使用し 4のaの国章にもイスラエルと右から左へ書かれています。地質調査所のマークは特になくこの国の紋章を使用しています。④-bはイスラエル地質学会のマークです。

5) キプロス 地質調査局
(Geological Survey Department)

キプロス地質調査局は商工省に属し イスラエルと同様に 国の紋章を使用しています。鳩がオリーブの枝をくわえている下の1960の数字は 独立した年です。英語ではキプロスではなくサイプラスと読みます。公用語はトルコ語とギリシア語を使用しています。

6) エジプト 地質調査所
(Geological Survey of Egypt)

世界最古の文明を誇るエジプトは 中東イスラム圏の指導者としての力と誇りを持ち 国名もアラビア語でミスル(センター)と呼ばれています。

7) モロッコ 地質局
(Direction de la Geologie)

エネルギー・鉱山省に属するモロッコ地質局は アラビア語とフランス語を併用しています。モロッコはアラビア語圏の西端に位置しているので 国名はマグレブ(西方)と呼ばれています。カサブランカという地名は日本人の熟年の胸にひびきますが 首都はラバトで 地質局もそこに設置されています。

8) スーダン 地質鉱物資源局
(Geological and Mineral Resources Department)

スーダンもイスラム圏で公用語はアラビア語を使用しています。余談になりますが アラブという言葉の定義はイスラム教を信じ アラビア語を話す国民を言います。その範囲は中東12か国 北アフリカ6か国の東西

1986年7月号

7000キロに及ぶ広さに展開しており その中心としてマスル(エジプト)があります。これは往時のサラセン帝国の範囲にほぼ合致します。

マークの中の GMRD は地質・鉱物・資源・局の各々の頭文字です。(桑形)

オアシスへの旅 エジプト滞在6日間の終りには 地下水開発の現場をぜひ見ておきたいという われわれの希望がいれられ バハリヤ(Bahariya)・オアシスを訪ねることができた。カイロの南西約350km リビア砂漠の真っ直中にあるが 産業用あるいは軍事用につくられた道路はよく整備され 距離と時間は別として 旅は比較的容易である(図1参照)。

2月19日(水) 快晴

エジプトに来て まだ一度も雨はおろか雲も見えていない。バハリヤに向け 早朝 カイロを出発。1時間も立たないうちに砂漠地帯に入る。その先は果てしも

Mediterranean Sea

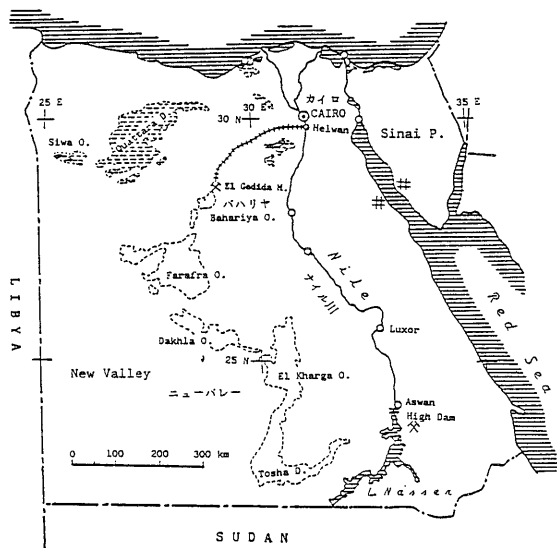


図1 エジプト略図

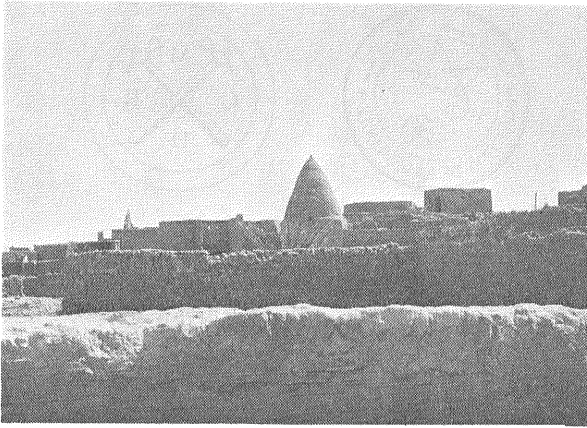


写真1 高台にあるバウィティ集落

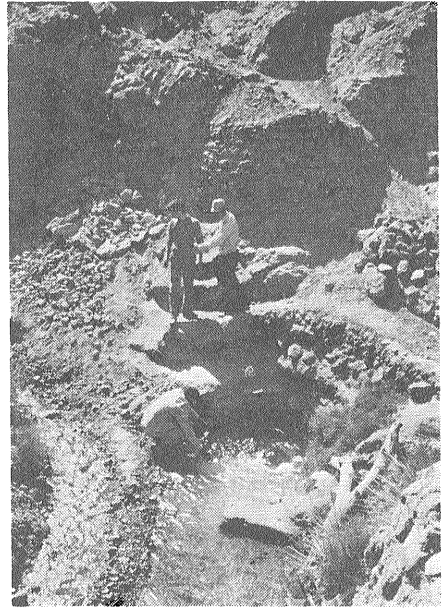


写真2 バハリヤの泉のひとつ

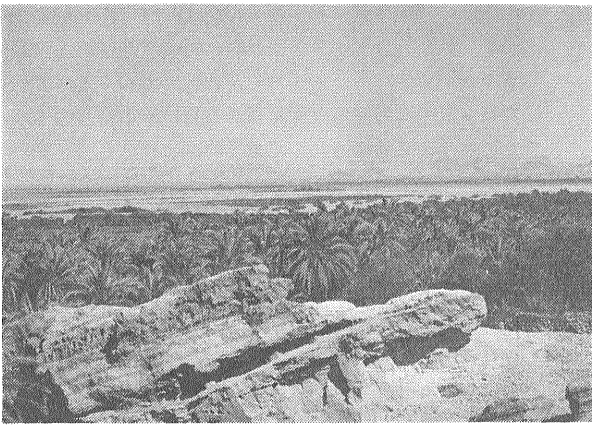


写真3 集落を囲むナツメヤシの林

設のモデル農場では 各種の野菜・果物の栽培 畜産 (牛・山羊・羊・鶏・家鴨・魚) の実験を行っていた。

2月20日(木) 快晴

いよいよオアシスを訪ねる日がやってきた。ゲストハウスを出て30分ぐらいは まだ これまでの砂漠地形をなしていたが 突然 デプレッション (窪地) の縁に到着。バハリヤ・オアシスは エジプトが現在 大プロジェクトとして開発を進めている ニューバレー (窪地群) の中では 比較的の小規模のものである(図1参照)。しかし長径約120km 短径約50km の広がりを示し わが国の阿蘇カルデラの10数倍の大きさにはなるであろう。しばらく雄大な景色を眺めた後 窪地に下る。最初に現れたのは ローマ時代の建物の遺跡だった。このオアシス らくだ道の歴史の古さを示す証拠になっているとのことである。10時ごろ バハリヤ・オアシス最大の集落 バウィティ (Bawiti) に到着。ここで2か所の泉(湧水)と2本の深掘り井戸を見学した。泉は人家が立ち並ぶ高台(写真1)の割れ目の底にあった。崖を下る途中 水を汲む泉の辺 その先の水路などは石積みでよく整えられていた(写真2)。日干し煉瓦と泥で作られた人家 その集落の回りにはナツメヤシが繁り 耕地も広がっていた(写真3)。

(斎藤)

なく続く 不毛の大地だった。対行車はほとんどなく 時速90km前後でひたすら南西に向けて走る。周りは大部分が“レキ砂漠”で 予想していた“スナ砂漠”とは大きな違いだった。2時間ほど走ったところで車を止め 小休止。朝 冷凍庫から取りだしてきたココローラは 氷が溶け 程よい飲み加減だった。1時過ぎに今夜の宿泊地 エル・ゲジタ (El Gedida) 鉱山に到着。バハリヤへは日帰りは無理で また オアシスには外国人の泊まれるところがないので この立派なゲストハウスを借りることにした。遅い昼食の後 鉱業所長の案内で 大きな鉄(赤鉄鉱+針鉄鉱)の露天採掘場 鉱石処理・積込場 資料館をはじめ 砂漠の中に作られた鉱山の町の諸施設を見学。ここでは 住宅はもちろん 学校 モスク スポーツ・文化などすべての施設がよく整い 明らかに西欧的な町並をなしていた。また 併